

コンテクストの構造

—構文コンテクストについて—

岡 部 匠 一

1. 定位と展望

ハーヴァード大学で、『ことばとコミュニケーションの心理』¹⁾の講座が初めて開かれたのは、1946年である。この講座の担当者ミラー教授は、その著、『言語とコミュニケーション』のなかで、心理学者がいう〈コンテクスト〉とは、「ふつうは、ある一定の時に於いて、ある個人に影響を与える条件の全体を意味する」と述べている。教授はさらに、〈ことばのコンテクスト〉とは、「ある個人に影響を与える条件全体よりも、より特殊なものであり、……ことばのある特定な単位²⁾がもつコンテクストとはその特定なことばの単位を取り巻く伝達行為からできている」と述べている。ここでさらに、「ことばのある特定単位」、「伝達行為」、「取り巻く」等の用語の意味を深く掘りさげることは別の機会に譲つて、我々は、ミラー教授と共に、〈ことばのある特定単位——たとえば、語から始まつて、ある本の一章まで——が、それを取り巻くことばの他の諸単位によつてどの程度に規定されるか〉を問題とすることにしよう。

ここで、本論の準備のためにまとめると、コンテクストは、「ある特定時点において、ある個人に影響を与える全体」という〈広義のコンテクスト〉と、「ことばのある特定単位を取り巻き、これを規定することばの他の諸単位」という〈狭義のコンテクスト〉の二つに分けられよう。もちろん、厳密に言えば、狭義のコンテクスト——内言語コンテクスト——は、広義のコンテクスト——外言語コンテクスト——に含まれることになる。

本稿は、この二種のコンテクストのうち、内言語コンテクストの一部をなす構文コンテクストの型態と機能を、英語の具体例についてみたものであり、別の機会に発表した拙稿、《コンテクストと語彙》⁴⁾を承けている。が、内言語コンテクストの細かい論に入るまえに、コンテクスト一般について他の場所⁵⁾で述べてきたことを展望しておこう。

-
1. *The Psychology of Speech and Communication*
 2. George A. Miller, *Language and Communication* (New York : McGraw-Hill Inc., 1963), p. 81
 3. *ibid.*, p. 81
 4. かりばね, vol., 5. pp. 9-10 (1965)
 5. 岡部, “コンテクストについて,” 英語の教授と研究, vol. 2. pp. 24-27 (1963)
——, “コンテクストと語義,” 信州大学文理学部紀要, vol. 14, pp. 38-47 (1964)
——, “ことばとコンテクスト,” 中島教授記念論文集, 東京: 研究社, 1965, pp. 253-261
——, “構文コンテクスト,” 信州大学文理学部紀要, vol. 15, pp. 36-41 (1965)

まず、広義のコンテキスト、すなわち、外言語コンテキストについて考える。「一人の少女が、1942年、ボストンのナイトクラブで、“Fire!” と叫んだとき、その部屋に居合わせた人たちは、ほとんどすぐに、彼女がなにを言っているのか分つた。」この場合の“Fire!” ということばの意味は、周囲の状況、ウェブスターのいう、いわゆる「物質的な状況」によつて、ほとんど間違いなく、“火事だ!” を意味するものと受けとられた“Fire!” は、たまたま、一語からできている発話だから、狭義のコンテキスト、すなわち、この語を取り巻く他の語や語群によつてこの語の意味が“火事だ!” に規定されたのでないことは明らかである。

次に、今考察した外言語コンテキストの例、“Fire!” を使つて、内言語コンテキストを考えてみよう。「“Fire!” を取り巻くほかのことばの単位」として、“Get ready!”、“Take aim!” を“Fire!” の左側修飾語句としてこれに加え、“Get ready!”、“Take aim!”、“Fire!” という発話を作る。この場合に、“Fire!” の意味を、“射て!” に規定しているのは、この発話を「取り巻く四圍の状況」として表われる、非言語的材料からできている外言語コンテキストではない。明らかに、「Fire! を取り巻く他のことばの単位」が、内言語コンテキストとして働き、“Fire!” の多くの意味のなかから、“火事だ!” ではなく、“射て!” の意味を実現させていると考えられる。

この“Fire!” (“火事だ!”) の場合のコンテキストは、外言語コンテキストのうち、いわゆる<場所のコンテキスト>と言われる例である。それゆえ、また、“Take aim!”、“Get ready!” という内言語コンテキストの意味規定機能を待たなくとも、“Fire!” を、“火事だ!” ではなく、“射て!” の意味に規定することは可能である。たとえば、「海戦」という<場所の外言語コンテキスト>を考えると、砲撃戦には、“Fire!”、あるいは、“Shoot!” がそれぞれ“射て!” の意味に使われていることを想起されたい。このように海戦に限らず、「射ち合い」という「外部的状況」を考えれば、“Fire!” には、先に挙げた様な内言語コンテキストによらないで、“射て!” の意味が一義的に当てられることは明らかである。問題は、“Fire!” のみでは、“射て!” とともに、“火事だ!” とともに規定できないという意味のあいまい性という意味現象が、我々にコンテキストの存在を意識させ、その型態と機能を探求させているということである。

2. 第1型構文コンテキスト——語彙拘束型 (他動詞 drop の場合)

先に述べたように、拙稿《コンテキストと語彙》(かりばね, vol. 5, pp. 9-10, 1965)を含む、筆者の一連のコンテキスト試論を承けて、「構文コンテキストの語彙拘束型」から

6. Robert H. Moor, “Context,” in *Introductory Readings on Language*, p. 204
7. Webster IND 3, s.v. context, “associated surroundings, whether material or *mental*” (underline is mine)
8. <right adjunct> in Zellig Harris, “Transformational Theory.” *Language*, vol. 41, p. 364 (1964)
9. Archibald A. Hill, *Introduction to Linguistic Structures* (New York : Harcourt Brace & Co., 1958), p. 350
10. この場合は“Fire!” に先行する(左側)修飾語句の“Get ready!”と“Take aim!”.

考えてゆきたい。

① (物を) 落す : I dropped my purse. ‘私は財布を落した。’ ② (物を) 届ける : I will drop this at your door in passing for my drive. ‘ドライブのついでに、君の家に、これを届けてやろう。’ ③ (あることを) やめる : I dropped the subject. ‘私はその問題をやめにした。’ これらの文、①、②、③に共通なことは、そのいずれにおいても、動詞 drop の他動詞の意味が実現されていることである。すなわち、被規定素 drop の他動詞の意味の実現は、「drop を取り巻く構文型式から生まれる意味の排除、および限定作用」——構文コンテキストの機能——によるものと考えられる。しかし、被規定素 drop の他動詞の意味を、① (物を) 落す、② (物を) 届ける、③ (ある事を) やめる、というふうには、さらに細分化させる意味規定の働きは、上の、①、②、③のそれぞれの文における目的語のもつ「語彙の意味から生ずる意味規定力」——語彙コンテキスト——から出てくるものと考えられる。

この考察を、一般化してまとめると、動詞 drop および、多くの自他両用の多義動詞——多くの語彙を内包している動詞——の、ある特定な意味の実現を考える場合には、「動詞の右側の要素が直接目的語であるという構文型式」——構文コンテキスト——が表われれば、その動詞の自動詞の意味は、すべて排除されてくると考えられよう。しかし、この構文コンテキスト——動詞の右側要素が直接目的語——は、それのみでは、実現された drop の他動詞の意味のうち、さらに、その文にふさわしい drop のある特定の語彙の意味を実現する力を持っていないことは、①、②、③の例文から明らかである。従つて、この場合には、「被規定素 drop の右側要素として直接目的語が存在するという構文型式」——構文コンテキスト——は、被規定素 drop の語彙の意味の規定的(限定的)機能をもつというよりはむしろ、当該被規定素 drop の自動詞の意味の排除機能を果していると考えべきである。というのは、すでに述べた様に、①、②、③の例文で、drop の個々の具体的な語彙の意味は、「個々の目的語のもつ語彙の意味が drop に対してもつ、drop の語彙の意味を規定する作用」——語彙コンテキストの働き——に待たねばならないのだから。

3. 第1型構文コンテキスト——語彙拘束型 (自動詞 drop の場合)

drop の他動詞の意味の実現の場合のコンテキストの意味規定作用と同じようなコンテキストの働きが、drop の自動詞の意味の実現の際にもみられる。① 落ちる : you might hear a pin drop. ‘ピンが一本落ちる音さえ聞えるほどの静けさだ。’ ② 倒れる : They were about to drop with fatigue. ‘彼らは疲れて今にも倒れそうであつた。’ ③ ぼろりと落ちる : The sword dropped out of his hand. ‘劔が彼の手からぼろりと落ちた。’ これら、①、②、③の例において、drop のそれぞれの特定の意味の実現のためには、2. に述べ drop の他動詞の意味の場合とは逆に、「直接目的語が存在しないということ」——限定、排除的な構文コンテキストの働き——では不十分である。drop のそれぞれの特定の語彙の意味の実現のためには被規定素 drop と結ばれた、それぞれの文中のある一部分——規定素——の語彙の意味の支え、すなわち、語彙コンテキストの働きを必要とする。従つて drop の個々の自動詞の意味の実現においても、2. でみたこの動詞の他動詞の意味の実現の場合と同様に、構文コンテキストと語彙コンテキストの重合作用がみられる。

4. 第1型構文コンテキスト——語彙・場面拘束型(1) (他動詞 stand の場合)

1. 2. 3. において述べた、構文コンテキストの意味規定力のみでは、具体的な個々の語彙的意味の実現は完全には行われぬということは、目的語が代名詞で表現される場合には、特にはつきりと認められる。たとえば、動詞 stand は、次の例文にみられるように、色々な他動詞的意味を持つことができる。①立てる：She stood the candle on the floor. ‘彼女は、ろうそくを床の上に立てた。’ ②(品物が)……に耐える。This color will stand washing. ‘この色は洗つても落ちない。’ ③堪える：I can't stand this heat any longer. ‘もうこの暑さには堪えられない。’ ④おごる：I will stand you a dinner. ‘ひとつ夕食をおごろう。’

しかし、ここで、上の①、②、③、④の例文の目的語を代名詞 it で置きかえた文、I will stand it. を考えてみよう。この文においても、1. 2. 3. で考察した様に「目的語 it が stand に後置されているという文の構造から生み出される意味規定力——構文コンテキストの働き——によつて、動詞 stand (被規定素) が潜在的に持つ自動詞的意味のすべては排除される。しかし、また、1. 2. 3. で考察した場合と同様に、stand の他動詞的意味のうちいずれの特定の意味(①立てる、②堪える、③おごる)が、I will stand it. の文において実現されているのかは明らかでない。すなわち、目的語が、先に挙げた例文、①、②、③にみられるような実詞ではなくて、代名詞の it である場合には、文、I will stand it. は、①私はそれを立てる。②私はそれを堪えしのぶ。③私はそれをおごる。のいずれに解されるべきかは明らかではない。この事実は、疑いなく、他動詞が被規定素である場合には、目的語の存在という構文コンテキストだけでは、当該被規定素のある意味の一義的な実現は、一般には行われぬということを示している。

それゆえ、文 I will stand it の場合には、目的語 it のもつ語彙コンテクの働きの弱さは、ふつうは、直接的な話し場——その発話を取り巻く四圍の外言語的状況——、あるいは、間接的な話し場——その発話を取り巻く、話され、あるいは書かれたことばの連鎖——のもつ意味規定力(外言語コンテキスト)が、最小規定素——被規定素の当該意味の実現に必要な最小の意味規定力を担う要素——として表われる。それゆえ、文、I will stand it. はこれを取り巻く、外言語的状況によつて、①私はそれを立てる。②私はそれを堪えしのぶ。③私はそれをおごる。のいずれかに解されることになる。また、この I will stand it を取り巻く、間接的な話し場を考えてみると、The girl began to titter. Lane couldn't stand it. ‘その少女はくすくす笑い始めた。レインはそれを我慢できなかつた。’にみられる様に、stand は、‘堪えしのぶ’の意味に一義的に規定されてくる。もちろん、目的語が、代名詞やそれに類した語句ではない実体詞の語句であれば、このような、直接、あるいは、間接的な話し場による語彙コンテキストの補いは必要ではない。例：She couldn't stand the climate. ‘彼女はその気候に堪えられなかつた。’

5. 第1型構文コンテキスト——語彙・語形拘束型(1) (副詞句——前置詞句——が最小規定素として働く場合)

まず初めに、被規定素として、4. で考察した動詞 stand をとると、この動詞は、二つの他動詞的意味、①立てる (She stood the candle on the floor. ‘彼女はろうそくを床の上に立てた。’) ②堪える (She couldn't stand the climate. ‘彼女はその気候に堪えられなかった。’) を、与えられたそれぞれの例文において実現している。そして、この‘立てる’、と‘堪える’の意味の差は、「場所を表わす副詞句——前置詞句——の存在」——構文コンテキストの働き——によつて、その実現が助けられることが多い。まず、被規定素として stand をもつ具体例について考えてみよう。

③ It failed to stand the test. ‘それは検査に不合格だった。’

④ She stood the spoon in the cold water. ‘彼女はスプーンを水の中に立てた。’

③、④はいずれも、「被規定素 stand の右側に目的語をもつという構造——構文コンテキスト——によつて、被規定素 stand の自動詞的意味は排除され、その他動詞的意味のみが実現されることになる。次に、③の文では the test、④の文では、the spoon (被規定素 stand の③、④の文における目的語)の語彙的意味——語彙コンテキスト——によつて、被規定素の動詞 stand には③の文では、‘堪える’、④の文では、‘立てる。’という特定の語彙的意味が実現されることになる。この構文コンテキスト、語彙コンテキストの重合的な働きは、1. 2. 3. 4. を通じてみてきたとおりである。しかし、ここで考えられることは、④の文、She stood the spoon in the cold water. ‘彼女はスプーンを水の中に立てた。’では in the cold water という副詞句——前置詞句——もまた、目的語 the spoon の規定素としての働きと同様に、前置詞句という型式——構文コンテキスト——と、場所の副詞的修飾語句として stand に対して意味規定作用を及ぼしているということ——語彙コンテキスト——の二つのコンテキストの働きを、被規定 stand に対して持ち、この動詞の意味を一義的に、‘立てる’に実現するのを助けているといえよう。しかし、明らかに、場所の副詞句 in the cold water は、④の文、She stood the spoon in the cold water. ‘彼女はスプーンを水の中に立てた。’では、目的語の the spoon と比べると、被規定素 stood に対しては二次的な構文・語彙コンテキストしか作っていない。なぜならば、前置詞句 in the cold water が存在しなくとも、目的語 the spoon が存在していさえすれば、動詞 stood の意味は、④の文では、‘立てる’に一義的に実現されるからである。

しかし、次のような場合、すなわち、他動詞+前置詞句ではなくて、自動詞+前置詞句の構造においては、前置詞句——場所の副詞句——は、被規定素の動詞に対して、二次的な構文・語彙コンテキストではなく、最小規定素の構文・語彙コンテキスト (被規定素の意味の実現に必要な最小の意味規定力をもつコンテキスト) として表われてくる。

具体例についてみよう。⑤ They stole. ‘彼らはこそどろをした。’ ⑥ They stole cautiously towards the house. ‘彼らはその家の方に注意深くしのび寄つて行つた。’ この二つの文においては、⑤ ‘こそどろを働く’、⑥ ‘しのびで行く’の意味の弁別は、明らかに場所の副詞句 cautiously towards the house の構文・語彙コンテキストの意味規定作用によつて行われている。それゆえ、自他両用動詞においては、その自動詞的意味のある特定な意味の実現の際

には、副詞句のもつ、構文・語彙コンテキストの意味規定力が重要であることは明らかである。そして、上例の⑥のような典型的な場合には、場所の副詞句——前置詞句——は、被規定素の動詞 *stole* に対して最小規定素として働く構文・語彙コンテキストを作り、被規定素 *stole* の他動詞的意味の排除機能を果たす構文コンテキスト（目的語——被規定素の右側要素一の欠除）の働きを補なつていと言えよう。

6. 第1型構文コンテキスト——語彙・場面拘束型(2.1) （自他両用動詞 *make* の場合）

実際の発話や文においては、前置詞句が存在せず、最小規定素として働きうる実体詞が、被規定素の動詞の右側要素としてある——構文コンテキストの働き——にもかかわらず、被規定素の動詞の他動詞的意味が実現されないような場合がみられる。具体例についてみよう。文、⑦ *These people made good engineers.* は、ふつうは、‘これらの人びとは立派な技術者になつた。’と解される。しかし、すでにみてきたように、コンテキスト論の立場から問題になるのは、この文の被規定 *make* の意味を、‘……になる’に実現させる意味規定作用は、いかなるコンテキストがどのように働いて行われるかである。すなわち、この文において、被規定素の動詞の、他動詞的意味、‘……を作る’、‘……をする’ではなくて、自動詞意味の一つ、‘……となつた’を実現させるために働いているコンテキストの型態と機能が問われねばならない。⑦の文、*These people made good engineers.* ‘これらの人びとは立派な技術者になつた。’においては、被規定素の動詞 *made* の右側の実体詞要素 *good engineers* の文法的型式（*made* の右側に前置詞句を介さずに置かれていること）も、*good engineers* の語彙の意味も、いずれも、動詞 *made* を特定の自動詞的意味、……‘になつた’に実現するのに役立つていないことは、1. から5. までの考察から明らかである。ここでは、目的語の位置に実体詞要素があるという構造——構文コンテキスト——から、実現を期待される被規定素 *made* の意味は、他動詞の語彙の意味でなければならない。

このような場合には、4. で考えた文、*I will stand it* と同じく、初めに最小規定素として働くコンテキストは、外言語の話しの場に求められなければならないと予想されよう。

7. 第1型構文コンテキスト——語彙・語形拘束型(2) ——（副詞句が最小規定素として働かない場合）

具体例から始めよう。⑧ *These people made good engineers out of these young men.* ‘これらの人びとは、この若い人たちを立派な技術者にした。’（直訳：若者たちから技術者を作つた。）この文では、「目的語 *good engineers* の右側に前置詞句が存在するという構造」構文コンテキスト——が、規定素として働いて、被規定素の動詞 *made* の *be* 動詞的意味‘……になつた’を排除している。従つて、⑧の文では、*made* の他動詞的意味、‘…を作つた’が実現されてくる。しかし逆に、「目的語 *good engineers* の右側に前置詞句が存在しないという構造」——上述の構文コンテキストの逆——がみられる場合には、他動詞的意味が排除され、*be* 動詞的意味が実現されると考えられる。しかし、この一般論は、次のような例外を説明してくれない。⑨ *These people made good engineers for these oil-fields.* ‘こ

れらの人びとは、この油田の立派な技術者になつた。’この文では、⑧と異なり、「前置詞句 (for these oil-field) が good engineers の右側に存在する」——⑧と同一の構文コンテキスト——にもかかわらず、被規定素 made の他動詞的意味が実現されないで反対に be 動詞的意味 ‘……になる’ が実現されている。従つて、この、⑧と⑨の一見矛盾する構文コンテキストの意味規定作用を統一的に説明するためには、⑧の詞副句 out of these young men と、⑨の副詞句 for these oil-fields の作る語彙コンテキストも考慮されなければならない。

8. 第1型構文コンテキスト——語彙 場面拘束型 (2.2) (《These people made good engineers》のコンテキスト)

6. で予想したことは、⑦の文、These people made good engineers. ‘これらの人びとは立派な技術者になつた。’は、4. で考えた文、I will stand it. と同じように初めに最小規定素として働くコンテキストは、外言語コンテキスト——話しの間——に求められなければならないであろうということだつた。ここで最初に必要なコンテキストは、明らかに規定素の動詞 made の右側要素 good engineers を補語として規定してくれるコンテキストである。なぜならば good engineers が補語として規定されたということ——構文コンテキストの形成——が、made の be 動詞的意味 ‘…になつた’ を実現させるからである。そして、最初に good engineers を補語として規定してくれるコンテキストの形成(働き)に必要な条件はこの good engineers の指す物が、主語の these people の指すものと同一対象物であるということである。しかし、明らかに、good engineers と these people が指示する対象物が同一であることの構造的指標は、文、These people made good engineers. のどこにもみいだされない。従つて、この場合、被規定素 made の意味を自動詞的意味、‘……になる’に規定する最小規定素として働くコンテキストは、外言語コンテキスト——この文を取り巻く話しの間——であることが分る。
(未完)

Résumé

Structure of Context

Shoichi Okabe

It is a commonplace to assert that context determines meaning and that the concept of context is one of key ideas in the study of meaning in general and of meanings in particular. However we have very little understanding of how context behaves in an actual utterance or a sentence. For some reasons, perhaps including the lack of a suitable theory of meaning and the scarcity of literature on the subject, the study of context still, in current texts on linguistics, remains 'below the threshold of consciousness.' (Harold Whitehall, *Structural Essentials of English*, 1951. p. 29)

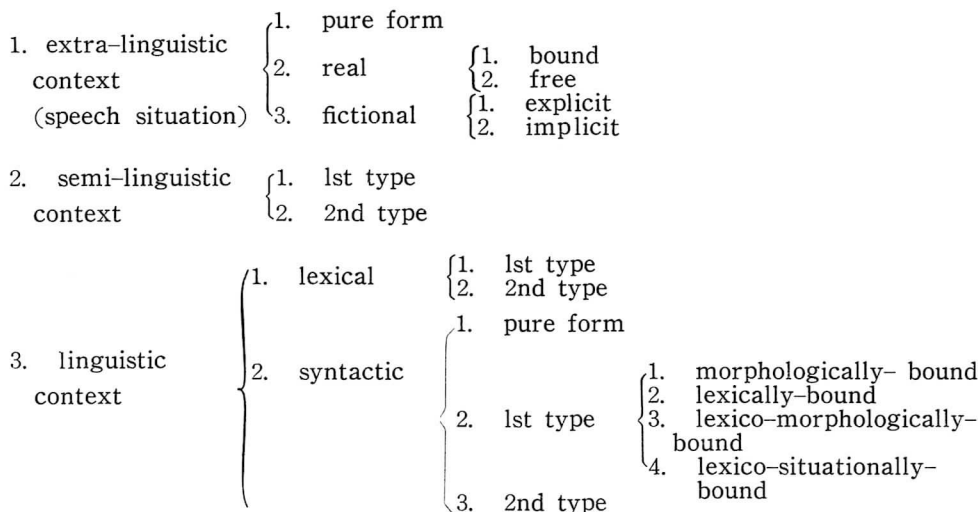
Nevertheless a discernible headway has been made from professor Fries' verdict, 'Structural meaning is not a vague matter of context, so called.' ("Meaning and Linguistic Analysis," in *Readings in Applied Linguistics*, 1958. p. 111) to professor Bach's vindication, 'It is important to take into account the significance of linguistic and nonlinguistic context.' (*An Introduction to Transformational Grammar*, 1962. p. 184)

Context has various forms and functions for the realization of a particular meaning which is adequate for a given utterance or a sentence. The Merriam Webster NID 3 defines one sense of contexts as 'the part or parts of a discourse preceding or following a text or a passage or a word or so intimately associated with it as to throw light upon its meaning, 'along with another meaning, 'associated surrounding, whether material or mental.' Hence two kinds of contexts are elicited from Webster : the extra-linguistic (situational) context and the linguistic context.

An extreme case of the clearing up of ambiguity by the extra-linguistic context is that stock example of "Fire!", the identification of which either with the imperative 'shoot!' or with the expression of alarm at the outbreak of fire. (Cf. fns. 6 & 9) A less formidable case of 'the disambiguation' by linguistic context is 'Our store sells alligator shoes.' vs 'Our stores sells horse shoes.' (Dwight Bolinger, "The Atomization of Meaning" *Language*, vol. 41, p. 556 & 568 (1965)). These examples of extra-linguistic context shows that it is next to impossible to contrive any tightly constructed theory of context, because it involves too much; nothing less, in fact, than everything we know. Hence the explication of linguistic context is a more modest enterprise, because this does not entail 'a scientifically accurate knowledge of everything in the speakers world.' (Leonard Bloomfield, *Language*, 1933. p. 139)

Standing on the shoulders of professor Amosova ("Word and Context," *Leningrad University Transactions*, nr. 243, 1958. p. 1-23. "On Syntactic Context," *Lexicological Researches*, vol. 5, 1962. p. 36-45), the present writer has worked out a system of linguistic context which seems to be going a long way to account for the realization of a particular meaning in a given utterance or 'concatenation.'

A tentative diagram of a system of linguistic and extra-linguistic context follows.



In this paper it is the present writer's intention to carry his research for a system of context into the area of the syntactic context, especially into its separate branch, which is provisionally termed the 1st type syntactic context.

In sum, I. it is found that pure syntactic contexts are rare occurrences and morphologically or lexically-bound ones are of universal phenomena. 2. lexical context is called for when a syntactic context is not equal to narrowing down a set of meaning into a particular meaning which is adequate for a given utterance or a sentence. 3. lexical or morphological context operates simultaneously upon both of lexical and grammatical meaning of a given portion of utterance which awaits an adequate interpretation. 4. when neither syntactic nor lexical (or morphological) context function as an initial minimal defining element one has no other recourse but to the speech situation (i. e. the extra-linguistic context) for it.